



FULL COMBO

ここはとあるゲームセンター。大学の近くに立地しているため、来店するのはほとんどが大学生だ。時刻は午後5時頃。授業が終わった学生がちらほら増え始める頃だ。その一角にちよつとした人だかりができていた。

その中、心にいるのは1人の少年だった。細身で身長は低く、中性的な雰囲気が着ている制服から少年だということがわかつた。ここから数駅ほど離れた高校の制服である。

少年は音楽に合わせてプレイヤーがアクションをとるゲーム、いわゆる『音ゲー』と呼ばれるゲームをプレイしていた。その中でも少年がプレイしていたのは『ダンシングレボリューション』というゲームである。画面上を下から上に流れる上下左右の矢印型のアイコンにそれぞれ対応した足元のパネルをリズムに合わせて踏むゲームである。

比較的体を激しく動かすゲームだが、少年はその華奢な見た目に反し、軽々と次々に流れてくるアイコンを正確に踏んでいた。コンボが決まる度に周りで小さな拍手が起ころが少年は全く気付いていない。完全に自分の世界に入り込んでいるようだ。

最後の曲を終えたとき、ようやく少年は自分の周りに人だかりができていることに気付いた。しかもその視線が自分に向けられていることに気付いた少年は急に恥ずかしくなり、荷物を持って一目散にゲームセンターを後にした。

少年の名前は藤野楓。ダンシングレボリューション、通称『ダンレボ』が好きな高校1年生である。

2週間前に入学してからはほぼ毎日のようにこのゲームセンターに通っているが、先ほどのようなギヤラリーに囲まれるのは初めてだった。そろそろ大学生が授業をさぼり始める時期なのだろうか。目立つのがあまり好きでない楓にとつてはいい迷惑である。このゲームセンターはちょうど通学路の途中にあり通いやすい位置にあるためできれば離れたくない。高校の近くにもゲームセンターはあるのだが、そこにはダンレボがないということが楓にとつては不満だった。明日は人が少なければいいな。と思いながら、そのまま家に帰った楓は自室でダンレボのサントラを聴いていた。

次の日、楓はいつものように早めに学校に向かった。まだまだ人の少ない教室内を横切り、誰にも挨拶せずに席に座る。入学してから

はいつもの光景である。

「おはよー」
「おはよー！」

始業時間のチャイムが鳴る直前、元気な声が教室に響いた。隣の席の松山日向である。彼は自分の席に座る前に楓に声をかけてきた。

「よつ、藤野！ おはよー！」

「……おはよ。」

楓は控えめに返事をした。入学して席が隣同士になつてから毎日の光景である。何故わざあまり親しくもない自分に向かつてわざわざ挨拶をするのか楓にはわからなかつたが、おそらく席が隣だからとかそれだけの理由だろう。世の中にはこういつた誰にでも分け隔てなく話しかけられる人間は一定数いるものである。そして、楓はそういつた種類の人間が苦手だつた。

あまりにそつけない日向は返答に少しショックを受けていたようだが、他の誰かに呼ばれたのかすぐにどこかに行つてしまつた。彼のようなく明るく活発な人柄の人間には自分と違い、たくさんの人間が集まるのだ。

楓は昔からダンレボにしか興味がなかつたせいか、いまいち周りの会話についていけなかつた。他のものに興味を向けようとしても全く夢中にならず、いつの間にか周りから孤立していた。何故周りの人間はあそこまで色々なことに夢中になれるのか楓にはわからなかつた。自分はダンレボが好き。それでいいじゃないかという結論に至つた結果が今の状況である。

その後担任が教室に入り、ホームルームが終わつた後、いつも通りに授業が始まつた。楓はいつも通り授業を受け、休み時間も予習をしたり音楽を聴いたりして1人で過ごしていた。そうこうしているうちに放課後がやつてきた。楓が一番心待ちにしている時間である。

学校の最寄駅まで走り、電車に飛び乗る。そしていつものゲームセンターの最寄駅で降り、徒歩でゲーセンに向かう。これが彼のいつもの放課後だった。

ゲームセンターに入るとき、音ゲーのコーナーに向かった。毎回思うのだが、何故音ゲーはこんなに奥まつた場所にあるのだろう。確かにクレーンゲーム等に比べるとマニアックなのかもしれないが。

音ゲーコーナーに到着した。今日は昨日と違い、割と空いているようだ。大学の授業時間の関係なのかはわからないが、これはラツキーである。

水曜の夕方は空いている。これは覚えておいたほうがいいかもしれない。

楓はさつそくダンレボの筐体の場所に行きカードをかざした。筐体に光が灯り、クレジットの支払い方法やプレイモードを選択する画面が出る。それらをスキップしてようやく選曲画面に辿り着いた。

たまにはテンポが速い曲をプレイしてみようかと、曲の検索方法を『BMPの速度』に設定した。探してみると何曲か知らない曲を見つけた。そういえばまた新曲が出たと聞いたな。知らない曲だが、レベルを見た感じ、初見でもクリアはできそうだ。今日の1曲目はこの曲にしよう。そう思い、楓は真ん中の緑色のボタンを押した。するとすぐにプレイ画面へと切り替わった。

音楽が流れ、少し間を置いてからアイコンが流れてきた。初見なだけあって初めはテンポが取りにくかったが、Bメロが終わる頃にはだいぶ慣れてきた。

楓はダンレボをしている時間が一番好きだった。周りの煩わしい世界から解放され、ひたすら目の前の譜面に集中することができ、リズムと一緒にれるような気さえする。

いよいよこの曲のサビの部分である。予想以上に連打が多く、足がもつれそうになるが、なんとかコンボを繋げることができた。そしてラストは長押しで終わつた。後ろのバーに体をもたれさせ、軽く息を吐く。

途中いくつかつまづいてしまつたが、見事初見でフルコンボを達成することができた。次は全てパーフェクトでクリアできるようと思つてその曲はお気に入りに登録した。

1曲目で今日は調子がいいと思つた楓は2曲目でも初見の曲を選んだがそちらはあと一歩の所でフルコンボを逃してしまつた。3曲目でも同様だつた。

今後は持久力が必要かな、と思いながら楓が後ろを振り向くと誰かが立つていてるのが見えた。暗いので顔はよく見えないがおそらく順番待ちの人だろう。早く立ち去ろうと荷物を持ったときだつた。

「あれ？ 藤野じやん！」

どこかで聞いたことがあるような声がして思わず振り向くと、そこにはクラスメイトの松山日向がいた。

「学校近くのゲーセンに行つたんだけどダンレボがなくてさー。そしたらこにはあるつて聞いたから今日初めて来たんだ。藤野はいつも来てるのか。」

日向が言い終える前に楓はその場を離れた。いや、逃げ出したと言う方が正しいのかもしれない。ほぼ走るような勢いで楓は去ろうとしたが、

「おい、なんのつもりだよ。」

腕に僅かな痛みを感じ振り向くと、そこには険しい顔をした日向が立っていた。

そのまま逃げることも出来ずに筐体から少し離れたベンチまで連れて行かれた。その間日向の表情は見えなかつたが、顔を見ていきなり逃げたのだ。普通に考えてもかなり失礼な行為である。しかし、逃げ出したのはほぼ条件反射だった。『あの時』のことを思い出し咄嗟に体が反応してしまい、日向のことを考えている暇はなかつた。

日向は相当怒つているに違ひない。先に謝つておいた方がいいだろう。

「あ、えつと、松山くん」

「……。」

「バ」、ごめん。いきなり逃げ出したりして。」

「……。」

「え、えーと……。」

「言つておくけど俺そんなに怒つてないぞ。」

その言葉に驚いていると、それまでベンチに座りこんでいた日向が突然立ち上がりこちらに顔を向けた。その顔はいつも教室で見かける笑顔と同じだった。

「なんで逃げたのかは気になるけど、そんなことより俺がお前に言いたいのは1つだけだ。」

日向は楓に人差し指を向けて言い放った。

「俺と勝負しろ！」

どういうことだ。全く日向の考えが見えない。いや、最初どう見ても怒つてる感じだつただろう。言いたいことはたくさんあつたが、楓にも突然逃げ出してしまった罪悪感はあつたので何も言わずに従つた。

その後2人は再びダンレボの筐体の場所に戻った。別の人気がプレイしている最中だったので周りに人がいないことを確認し、その後ろで待っていたのだが、その間終始無言だった。楓がチラリと隣の日向の表情を盗み見ると、彼は待ちきれないかのようにうずうずしているようだった。

「選曲はどうする？」

「そつちが決めればいいよ。僕はさつきやつたし。」

「了解！」

日向はさつそく慣れた手つきで画面を操作し始めた。そこそこやり込んでいるのだろうか。

「やっぱり最初はこれかな。あ、レベルはこれでいいか。」

「うん。」

「よし！」

2人は中央の緑色のボタンを押した。『準備完了』の合図である。

スコア画面を確認していると日向が声をかけてきた。

最初の曲は比較的アップテンポな曲だった。お互いに既にプレイしたことのある曲だったため、難なくクリアすることができた。楓が

「なあ藤野」。俺とお前のスコア欄見比べてみろよ。」

そう言われて楓が日向のスコア欄を見ると、日向のスコアは楓のスコアよりも遥かに低い」とに気づいた。

「あれ？ 松山くんクリアできなかつたの？」

「バ、ちげーよー！ GOODを大量に出したんだよ！」

話は少し変わるが、リリヤンの『ダンシングレボリューション』というゲームの採点基準について説明する。このゲームでは画面上のアイコンに下から流れてきた矢印状のアイコンがぴたり重なつたときが一番得点が高く、得点が高い順にMARVELOUS、PERFECT、その次がGREAT、GOODと判定が出る。ちなみに失敗するMISSという判定が出る。GOOD以上の判定だとゲージが溜まっていき、ゲーム終了時にゲージが0より上だと『クリア』となる。MISSだとロンボが途切れ、ゲージの値も減つっていく。

MISSが続き、ゲージの値が0になつてしまふと、たとえ曲の途中であつても強制終了となつてしまふ。つまり、最後までプレイしたければGOOD以上の判定を狙えばいいのだ。しかしGOODだとスコアが入らないので、スコアを得るためにGREAT以上を狙わないといけない。日向はそれを逆手にとり、あえてGOODばかりを狙うことによつてロースコアを叩き出したといつじだ。

「……分かつたけどそんな遊び方してゐる人初めて見た。」

「だろ？ 俺ぐらいしかやつてないだろうなー。」

ひなた とくいげ
日向は得意気に胸を張った。

「とりあえず早く次の曲選んだら？ 時間ないよ。」

がめん きょく
画面を見ると残り時間があと僅かだったので日向は急いで選曲をした。

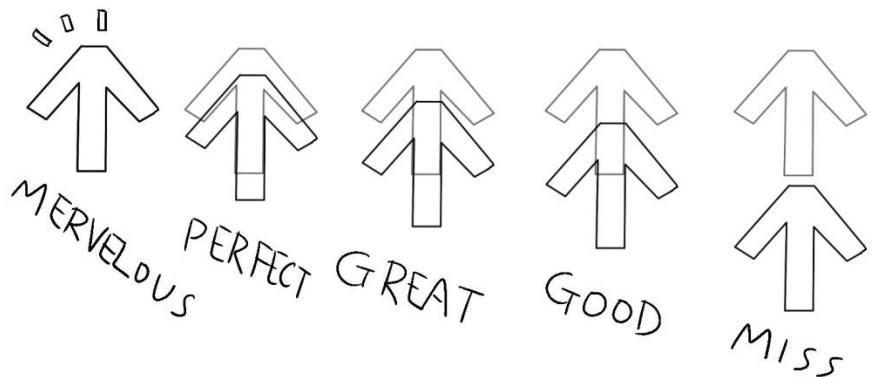
2曲目は先ほどと同レベルの曲だが楓がプレイしたことのない曲だった。時間終了間際に急いで選曲をしたせいか日向も知らない曲らしい。

「まあレベル的にクリアはできるだろうけど気を付けて。」

「わかつてるよ。2人ともゲージが空になつたらそこで終わりだからな。」

2人ともなんとかクリアすることができた。いよいよ3曲目である

「いや、僕は別に……。
最後はお前が決めていいぜ。」



「……」まで付き合つてもらつたんだからお礼だよ。」

ひなた
日向にそこまで言われたのでじやあ……。
かえで
と楓はある曲を選んだ。

「あ、確かこの曲新曲だよな。できるかな。」

「まあ、どっちにしろこれで最後だからな！」
最後は真剣勝負しようぜ！」

ボタンを押しながら日向が言つた。
ひなた
楓はそれに対して特に反応はせずボタンを押した。
かえで
はんのう
とにかく目の前の曲に集中したかった。
きょく しるべやう

軽く息を弾ませながらも途中までは順調にこなしていた。いよいよ最難関のサビの部分である。

—

最後まで帝ひそかにいたつた。上回目よりらへイスコアだ、フレコノボでクリアしそう。その一心で楓は画面を見つめていた。一瞬、隣の日向が息を詰めたのが楓にも分かつた。当然だろう。楓がフルコンボを達成したのも奇跡だったのかもしれない。それでも

「はあー……。」

そして最後の長押し。緊張が解れる瞬間である。楓が得点画面を見るとミスはなかつた。しかも先ほどよりもスコアが高かつた。

よし！ 楓は心中で飛び上がりそうな程に喜んでいた。そのとき隣からうめき声が聞こえてきた。頭を抱えて唸つている日向である。

日向の方の得点画面を見ると、ミスが1つだけ付いていた。

「残念だつたね。」

「あと一歩だつたのに……。にしてもお前すげーな。これレベルは低いからクリアは簡単だけどフルコンボとなるとなかなか難しそうじやん。」

「いや、さつき1回やつてたからだよ。」

「それでもすごいよ。ほんと」

2人が話していると、周囲から拍手が起こつた。プレイに夢中で気づいていなかつたが、いつの間にかギャラリーが集まつていたらしい。

楓は即座に逃げようとしたが、周りを完全に囲まれているため逃げられない。

「いやー。ここ凄いんだな。こんなにギャラリーが集まつての初めて見た。ここ通おうかな。」

上機嫌で周りに手を振る日向とは対照的に、楓は狭い筐体の隅で縮こまつっていた。

ようやくギャラリーから解放された2人はゲームセンターから出た後、駅の方面に向かっていた。

「いやー、楽しかつたな。またやりたいわ。」「はは……。」

はつきり言つて冗談じやないと思つた。もう先ほどのようなことは勘弁したい。

「じやあな！ また明日も来ようぜ！」

「え？」

日向は駅に着くとそのまま自転車置き場に向かつて行つてしまつた。残された楓はまたあいつに付きまとわれるのがとうんざりした。

次の日、楓はいつも通り早めに学校に来た。ちなみにこの時間帯に来るのは別に何かあるわけではなく、電車の時間の都合である。

「藤野くん。ちよつといい？」

「藤野くん。ちよつといい？」

呼ばれたので声がした方向を向くと、同じクラスの女子が立つていた。楠木菜穂である。明るい性格でよく友達と談笑している姿を見か

けるが、当然楓との接点はない。

「あのね、今日私と藤野くんが日直だから分担をどうしようか話し合おうと思つて。日誌は私が持つてきたんだけど。」

このクラスでは日直は男女2名のペアで行うことになつていて。といつても仕事内容は花の水やりや授業後の黒板消し、移動教室の際の鍵締め等そこまで難しいものではないので正直1人でも行えそうなものばかりである。

「今日3限目体育があるけど男子は教室で着替えるでしょ？ 鍵当番はお願ひしてもいいかな。」

「うん。いいよ。……そういえば楠木さんは何か部活に入ってる？」

「え、えっと、美術部だけど……。」

いきなり所属クラブを訊かれて一瞬戸惑う粟穂だがとりあえず答えておいた。

「じゃあ放課後部活だよね。放課後の仕事は僕がやっておくよ。」

「え、でも……。」

「別に帰宅部で暇だし良いよ。」

これには理由があった。日向は昨日『一緒にゲームセンターに行こう』と言った。ならおそらく放課後に向こうから誘いに来るはずである。

日直で帰りが遅くなるという理由を付けておけば、誘われても断ることができる。そうすれば昨日のようになることはないだろう。も

し彼が昨日のことを忘れていて誘いに来なかつたならそれはそれで別にいい。

「わあごめんね！ じゃあ日誌と黒板消しは私がやつておくから藤野くんは鍵締めと放課後の仕事よろしくね！」

「うんわかった。」

楓が答えるのと日向含めた男子生徒数名が教室に転がり込んでくるとホームルームの予鈴が鳴るのはほぼ同時だった。毎朝思うのだがもう少し早く登校できないのだろうか。

「よー！ 藤野おつはよー！」

「おはよ。」

「……昨日せつかく仲良くなったのにお前は相変わらずだな。まあいいけどさ。」

昨日仲良くなつた覚えはないので楓は無視をした。少なからず日向は傷ついたようだがまあいい。

その日もいつも通り授業が進み、そして放課後が来た。菜穂は申し訳なさそうにしていたがどうせすぐに終わる用事だから気にする必要はない。そのことを告げると菜穂は少し表情を明るくして部活へと向かつた。

その後淡々と仕事をしていた楓だが、日向が声をかけてくることはなかつた。やはり忘れてはいるのか……。楓は安心して日直の仕事をこなし、ゲームセンターへと向かつた。遠くで運動部の掛け声や吹奏楽部の楽器の音が響いていた。

楓はゲームセンターに着いてすぐにダンレボの筐体の方に向かつた。するとそこには意外な人物がいた。

「よお。遅かつたな。」

「え、なんで松山くんがここに。」

そこにいたのは日向だつた。楓は驚きを隠せなかつた。

「昨日『また明日来よう』って言つたじやん。覚えてねーのかよ。」

ケラケラと笑いながら答える日向に対し、楓はショックを受けていた。迂闊だった。あれは『一緒に行く』という意味ではなかったのか。

学校でなんのアクションもなかつたせいで完全に油断していた。

「で、ことで早速勝負しようぜ。」

日向に腕を掴まるが、楓には抵抗する気力もなかつた。

「く、くそー！全然勝てねー！」

早速ダンレボで対戦をした2人だが、あと一歩の所で日向は楓のスコアを追い越すことができなかつた。3曲終えたがその全てにおいて楓に勝つことができなかつたのである。集中力が全く違うのである。楓は目の前の画面、音楽、足元の感覚全てを全身で感じている気がした。

「別に勝てなくともいいんじゃない？ GOODを極めるんでしょ？」

「いや、お前にはなんとなく勝ちたいんだ！なんてつたつてライバルだからな！」

いつの間にライバルになつたんだ。訳の分からぬ理屈を並べられた楓はうんざりしながらも答えた。

「うん。頑張れ。」

「……なんかムカつくな。まあいいや、他の機種でも勝負しようぜ。」

その言葉を言われた楓は一瞬戸惑つた。

「あ、いや、僕はダンレボしかやらないから。」

「ん？ どうした？ ひよっとして俺に負けるのが怖いからとか……。」

何も言わない楓に日向は首をかしげたが、特に何も言わなかつた。

「まあいいや。じやあ俺向こう行つてる。」

日向は他の機種の方へ向かつた。

「ふう……。」

ようやく一人になれた楓は近くのベンチに座り込んだ。なんなんだあいつは。。自分は1人で楽しみたいのである。昨日のように注目を集める可能性もあるのでなおさら彼とは関わりたくない。とりあえず飲み物でも買うかと楓はベンチを立つた。

「おーい！^{ふじの}藤野！」

遠くから呼ばれている気がするがどうせ日向だから放つておこうと思つたのだが。

「^{ふじの}藤野！ 聞こえないのか藤野！」

「……。」

周囲の目線が気になつてきたので渋々日向の方に向かつた。

「今日は新曲をやろうと思つてゐるんだけどさ。そういうや藤野は「これやつたことないのか？」

「音ゲーならダンレボ以外やつたことないよ。」

「……本当にダンレボしかやつたことないのか。」

自らは少し驚いた顔をしていたが、机には何かおかしいのかが少からなかった。
女さん。ことだけをしてくる。それだけである。

日向は気を取り直してゲームの設定を変更していた。どうやらパネルの光り方にもいくつかの種類があり、日向はそれを設定しているようだ。エフェクトによってやり易さが大分変わるらしい。

「個人的にこのエフェクトが一番やりやすいかな。」

何種類かあるエフェクトの中で日向が選んだのは花が開くような動きをするエフェクトだった。花が完全に開くのと同じタイミングで、ペナルを押せばPERFECTとなるようである。

「エフェクトによつてスコアが全然変わつてくるんだよな。曲は……これでいいか。」

を押せばPERFECTとなるよってある。

どうやら選曲を終えたらしい。このゲームはオンラインマッチングといって、その時間に同じ曲をプレイしようとしている全国の人と最大4人まで同時に対戦できるのだが、今回はその最大人数である4人と対戦できるようだ。

ひなた
日向が早速筐体に手をかざす。
きょうたい
曲が始まる前の一瞬、手の位置を軽く確認しているようだ。
きょく
かくにん

筐体から『Ready Go』と合図が聞こえ、曲が始まった。冒頭から彼方此方のパネルが光っては消えていく。花火みたいだな。と楓はぽんやりと思った。

画面を見る感じ日向もいい感じにコンボを重ねていいようだが、他の3人も負けじとスコアを積み上げている。1位が激しく入れ替わる。ふと、楓は日向の顔を見ると、彼は笑っていた。順位が激しく入れ替わるこんな接戦でも彼はあくまで楽しんでいた。昨日はプレイ中の彼の

様子は見られなかつたが昨日ダンレボをプレイしていのときもこんな感じだつたのだろうか。

楓がぼんやりと日向を観察している内に曲が最後まで終わつた。本当はプレイに夢中になつてゐる間に帰ろうと思つていたのだが思わず日向の様子に見入つてしまつた。総スコアは日向の自己ベストを更新し、他の3人の中でトップである。

「よつしや！ ほら見ろ！」

「あ、すごいね。」

「反応薄！」

日向は楓の反応に不満なようである。しかし気をとり直して選曲を始めた。

次の曲をプレイしている間も楓は彼を観察し続けていたが、彼はやはり最後まで楽しんでいた。他人がプレイしている様子を見たことがない楓には新鮮に思えた。自分以外にもここまで音ゲーを楽しんでいる人が他にいたんだ。それもこんな近くに。そう思うと楓は不思議な

気持ちになつた。今までに感じたことのない感情が体の奥からじわじわと湧き上がつてくる。

「あー疲れた。」

日向は近くにあったベンチにドカッと座り込んだ。楓も日向の隣に座り込む。何故だか先ほどまで日向に抱いていた嫌悪感は消えていた。

「そういえば今日まともに話すの初めてだな。」

周りの雑音に負けないよう少し大きめの声で日向が話しかけてきた。

「うん。確かにそうだね。学校でも話さなかつたし。」

「俺は休憩時間中もサッカーやつたりしてるからな。藤野もサッカーすればいいのに。」

「あんまり興味ないかな。」

「……お前ほんとダンレボ以外興味ないな。どうしてそんなに好きなんだ。」

「昔ダンレボのプレイ動画を見てかつこいいと思ったから。」

「それだけ？ じやあ他の機種には……。」

「僕はダンレボしかプレイしない。」

「まあ藤野らしいか。」

日向は笑いながら答えた。自分らしいってなんだと思ったがまあ気にしないでおいた。

「……松山くんはどうして音ゲーを始めたの？」

「俺おれ？ 小学校の時いとこ従兄おと哥が勧めてくれたからだよ。」

小学生に音ゲーを勧めるってどんな従兄だよと思ったが突つ込まないでおいた。

「たまたまゲーセンに連れて行つてもらつたんだけどさ。その時に一緒にダンレボやつたらすつげー褒められて。リズム感はないのに反射はんしゃ神経だけはすごいとか。」

「え、松山くんリズム感ないの？ それなのにどうやつて。」

音ゲーおととは音楽おんがくやリズムに合わせてアクションおとを取るゲームおとのことである。リズム感もないのにどうやつてあそこまでのスコアを叩き出しているのだろう。

「全部目押しょけんしだよ。初見しょけんで BPM がコロコロ変わる曲きょくにも対応できるし便利かんべんだぜ。GOODグッドも狙ねいやすいし。」

驚いた。昨日きのうのあの珍プレイは全て目押しょけんしだつたようである。確かに目押ししょけんでも可能かのうはあるが、やはりリズムに乗つてプレイした方が遙かに楽だと思うのにそれをやつてしまふとは。楓かえでは思わず笑ひなたつてしまつた。それを見た日向ひなたも笑みを零した。

「やつと笑ひなたつたな。」

「ん？」

「いや、藤野ふじのが笑つてる所初めて見たからさ。なんというか安心した。」

楓は首を傾げた。確かに自分が笑っている場面は珍しいのだろうがそれでも『安心した』というのが分からぬ。それを見た日向は慌てて訂正した。

「いや、安心したってのはおかしいな。嬉しかつたっていうか。」

「?」

「実はずっと探してたんだ。同じように音ゲー好きな奴を。で、やつと見つけた。寂しかつたんだよ。同じ趣味の友達がいなくてちょっとさみしかつたんだ。」

「……松山くんでも寂しいって思うことあるんだね。」

「は、失礼な！俺をなんだと思つてるんだよ！」

日向は顔を真っ赤にして反論してきた。日向のようないいことじやん。お前もそうちだろ？」

「好きなことを誰かと共有できるってすつげーいいことじやん。お前もそうちだろ？」

誰かと好きなことを共有する……。考えたこともなかつた。何故なら自分の世界に没頭して、ただひたすらにハイスコアを目指すことこそ

が真の楽しみ方だと思つていたからである。対戦も昨日が初めてだつた。

「うーん。よく分からぬ。」

「まあいいか。じやあどりあえず1つ聞いていいか？」

「何？」

「昨日なんで逃げたんだ？」

楓は内心ドキリとした。昨日は特に何も言われなかつたが実は気にしてはいた。いつかは謝らなければならぬと。ひなた 日向は楓の目をジッと見つめる。

「いや、別に、松山くんは悪くないよ……。ほぼ条件反射だったというか……。」

「どういうことだ？」

いつまでも黙つているわけにはいかない。正直に話しておいた方がいいだろうと思い、楓は話し始めた。

「昔ゲーセンでダンレボをやつてる時にクラスメイトがたまたま通りかかって音ゲーやつてることをからかわれたことがあってさ。昨日のことがその時のことと重なつたというか。だから別に松山くんは悪くないよ。僕が悪いんだし。」

ひなた 日向は黙つて話を聞いていたがやがて口を開いた。

「お前、そんな風にからかわれても音ゲーをやめようとは思わなかつたんだな。」

「うん。だつて、ダンレボは好きだし。」

じぶん せかい 自分の世界に没頭して、ただひたすらにハイスクアを目指すことが好きだった。それだけはけつして譲れなかつた。たとえバカにされても。

まつやま 「でも、松山くんと一緒にプレイしたことは楽しかつたよ。」

「……そうか。ならよかつた。」

日向はホッと息をついた。

「きつとそれは藤野にとつてダンレボをプレイすることが一番『自然』なんじやないかな。」

「自然？」

「そう。きつとダンレボをしてるときが一番自然体でいられるんだよ。さつきプレイしてた時も教室でいるときと段違いの会話量だったしな。」

そんなに話していたのだろうか。楓は少し疑問に思った。でも楓には少し心当たりがあつた。

「よくわからない……。でも、そうかもしねない。家にいる時よりも、教室にいる時よりも、筐体の上が一番楽しい。」

俺もだ。と日向は言った。

「好きなことにそこまで夢中になれるってすごいことじやん。誰にバカにされても気にする必要はねーよ。」

その後ゲームセンターを出た2人は並んで駅まで歩いていた。日向は駅に自転車を止めているらしい。

「なあ、明日も放課後一緒にプレイしないか？ 今日の曲のリベンジもしたいし。」

「うん。」

「あーでも明日俺日直なんだよな。遅くなつてもいいか?」

「別にいいよ。待つておく。」

話しているうちに駅まで辿りついたようだ。日向は駅の駐輪場に停めている自転車の鍵を開けた。

「じゃあな!また明日!」

日向が自転車に乗りながら手を振った後、楓も小さく手を振った。

「また明日。」

同じ趣味をもつ仲間を見つけて嬉しかったのは日向だけではなかつたのだろう

